俺とバカどもと幻想郷

サイクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺とバカどもと幻想郷

【Ｎコード】
Ｎ０６８４Ｚ

【作者名】
サイクス

【あらすじ】
ある者から追われ、瀕死の重症を負った神楽一族の生き残り。
そして一部の記憶も失ってしまう。旅に出たその者の行き先は
バカテスの世界！？他のオリキャラも出す予定です！
初めての作品で未熟なところもありますが。よろしくお願いします。

すべての始まり

それは・・・些細な出来事だった。

幻想郷にて――――――――

???「ハァ・・・ハァ・・ハァ・・・・」

俺が気が付いたときはもう、体力も限界を超えようとしていた。
両手は血で染まっている。足もフラフラだ。視界まで霞んできやがる。

???「くそっ！このままじゃ・・・・・！」

追っ手1「いたぞ！逃がすなぁ！！」

追っ手2「殺してでもそいつを奪え！！！」

ちッ、もう追いついてきやがった。あまり使いたくはなかったが・・・！

???「炎符『フレアグレネード』！！」

咄嗟に放った俺のスペルカードは火を噴き追っ手たちに襲い掛かる。
同時に俺の体から力が抜けていくのがわかった。
・・・調子に乗りやがって・・・・・！だが。

？？？「ッハハハハハ・・・・・・まぁいいさ。ここで終わるのも悪くねぇな。」

幻想郷での思い出が頭をよぎる。天狗のなんつったっけな・・・・・
あぁ射命丸だったか。そいつと競争したっけな。後、鬼の・・・・・・
伊吹萃香か。
そいつと力比べしたっけ・・・。全敗だったけど。
もう力が入らねぇ。後は終わりを待つだけ・・・・・・。

？？？「フ・・・・さらばだ。我が故郷・・・・」

そう呟きながら俺は意識を手放した。

「（いいえ・・・・あなたは終わらないわ。心がそう言っている・・・・。）」

八雲邸――――――――――

目が覚めたのは見慣れぬ一室だった。そして俺の頭に疑問が残る。

どういうことだ？俺は確かに死んだはず・・・・。

『ナゼオレハイキテイル？』

？「あら、ようやく目覚めたのね。さすがは一族の生き残り。たいした生命力ね。」

？？？「あなたは・・・？俺を知っているようだが・・・・。」

この家の主らしき女性がそこにいた。金髪の髪を下ろした綺麗な人だった。

紫「私は　八雲紫。あなた、名前言える？」

？？？「ん？あれ・・・・・・・・わからない。この幻想郷の最低限知識以外
なにも出てこない。思い出そうとしても・・・・・何もない・・・。」

紫「困ったわね・・・。名前がわからないんじゃ・・・・。」

考え込む紫、困ってるようなのである提案をした。

？？？「・・・あなたはさっき、『一族』と言いましたよね。一族と言うからには
何か苗字があるのでは？」

と、恐る恐る聞いてみる。え、何で敬語なのかって？
まぁ、この人見るからに強そうだし。カリスマ、というかなんというか。

紫「えぇ。あなたは古より伝わりし『神楽一族』。この幻想郷の中でも
トップクラスの戦闘能力と地位を持つ一族ね。」

それを聞いて俺は唖然とした。それって・・・・

神楽（？？？）「それって大昔に滅んだ一族ですよね。どういうことですか！？」

紫「それが生きていたのよ。貴方だけね。」

神楽「え・・・？～～～～～ッ！分からないことだらけだ！」

取り乱す俺を紫は優しく制する。

紫「落ち着いて。・・・・そうね、まずは貴方の名前、考えましょうか。」

それには俺も同意見だ。

どうか、崩壊的なネーミングセンスじゃありませんように・・・！

すべての始まり（後書き）

初投稿です！未熟ですがどうかよろしく・・・・
えっと、更新スピードは不定期かもです。
次回は紫が神楽の名前を決める・・・・のか？

第一問（前書き）

二話目です。
一週間に2回の更新を目指してます。
それでは、どうぞ！

第一問

八雲邸――

紫「それで・・・・・あなたの名前だけど・・・・・あなたの髪と目、空色だから・・・

『空護』なんてどうかしら？」

神楽「空護・・・か・・・・うん、いいかもな。これから俺の名は『神楽空護』だ。」

あれ・・・・意外とあっさり決まったもんだな。

どこぞの稗田さんみたいなネーミングセンスだと思ってたんだが。

（これは作者の勝手な想像です、お気になさらず）

紫「本当ならここに泊めてあげたいところだけど、生憎空き部屋がいないのよ・・・

だから、私が泊まるところを探してあげるわ。」

空護「そうか、それは助かるよ。すまないね。」

そういうと紫はお馴染みのスキマ空間を開ける。

その時、俺の頭に違和感があった、いやできたといった方が正しいか。

これは・・・・境界移動の知識が俺の頭に・・・流れ込んで来る・・・・！

空護「ちょっと待って。」

紫「何？」

空護「２つ確かめたいことがあるんだ、いいかな？」

紫「えぇ、構わないわ。」

と、紫も承諾してくれたとこで、俺はさっきの知識を元に紫と同じ境界を開く動作をしてみる。
すると案の定、紫と全くとまではいかないが、同じ境界が開いた。

紫「！・・・・あなた・・・その能力！やはり神楽の血を引いてるだけはあるわね。」

驚愕に目を見開く紫、無理もない。自分特有の力が他人に易々と使われたのだ。
驚かないほうがおかしい。

空護「紫の境界を開く動きを見たら、頭に情報が流れ込んできたんだ。
　それと、二つ目だけど、俺の刀、知らないか？２本あるんだけど。」

紫「ああ、あれね。今持って来させるわ。・・・・藍？例の刀持ってきて頂戴！」

藍「はい、ただいま。」

しばらくして、藍と呼ばれた女性は確かに俺の刀を持ってきてくれた。

空護「君が藍だね、俺は神楽空護だ。よろしく。とにかくありがとうな。」

藍「いえ、お気になさらず。」

紫「2人ともいい雰囲気のところ悪いk「どこがだ！（ですか！）」分かってるわよ・・・。
それで？2つ目は？」

空護「あぁ、俺が覚えてる限りは、神楽一族は皆、2つ能力を持つ、と
教えられた記憶があるんだが？」

ん？いつの間に敬語じゃなくなったって？まぁ、危険な奴じゃないことは確かだし、
第一俺は、堅苦しいのは苦手なんだよ。

紫「その通りよ、あなた少し記憶が戻って来たんじゃない？っと・・・質問の答えね、
あなたの言う通り神楽一族は、必ず、2つ能力を持つのよ。そして、
あなたの能力が今ので目覚めた。」

なるほど、俺の勘はあってたわけだ。そうするあとは・・・

空護「能力の名前・・・どうするかな？」

紫「そうね・・・・・・『ありとあらゆるものを学習し使役する程度の能力』
なんてどうかしら？」

長いな・・・・ま、でもいっか。とりあえず身を守る術はできた。

紫「さて、そろそろ行きましょうか。藍に頼んだ結果だけど、守矢神社。
そこが引き受けてくれるそうよ。」

空護「そうか、何から何まですすまないな。・・・んじゃ、行ってくる。
またここに来てもいいか？」

紫「ええ。いつでも歓迎するわ。」

にこっと笑顔を浮かべる紫。・・・・やべ、かわいすぎる／／／／

そして俺は境界を開き中へ入った。

第一問（後書き）

次は、プロフィール紹介でもしようかなと思います。

プロフィールとか

――――――オリキャラ――――――

名前　神楽空護（かぐらくうご）
見た目は、雄二と明久を足して2で割った感じ。
髪と目の色は空色で、怒りなどで制御不能になると、髪は赤、目は金色になる。

年　見た目は16，7辺り。実際は結構いってる

能力・ありとあらゆるものを学習し使役する程度の能力
　・頭に描いた物を具現化する程度の能力
（用は、あらゆるものをつくりだせる。生命等は不可）

所属Fクラス
紫の推薦で文月学園に編入してくる。
空護が、Fクラスで構わないというのでFクラスに。
紫によると、「かなりできる子♪」とのこと。

召喚獣

普段の装備は赤黒い甲冑で、FF7のセフィロスみたいな長い刀を持っている。

状況に応じ戦闘スタイルを変えられるが。１０点を消費する。
得意教科は、数学と英語以外全て。調子がいいと一教科８００点を超える実力の持ち主。
数学辺りになると２００～３００辺りまで落ちる。

腕輪
４００を超えると基本的にスペカやＦＦ，テイルズの技と同じ様な物が使える。
７００点を超えたときのみ、幻獣を召喚できる。
→バハムートやリヴァイアサン等、教科で変わる。

引き取り先の守矢一家は作者の想像でゲーマーということになっている。
故に、ゲームの操作も慣れている。

プロフィールとか（後書き）

とりあえずこんな感じです。
次回かその次辺りでバカテス編へ突入したいと思います。

第二問

――――境界

―引き取り先に藍を待たせてるから、わかるはずよ。

って言ってたっけ紫は。にしても・・・

空護「この目ん玉どうにかならないかねぇ・・・気持ち悪くて仕方がない。」

まぁなんにせよ、剣も守れたし、行き先見つかるし、紫に感謝だな。

ん?見えてきたな・・・・っし!

ズズズズズ・・・・!スタッ

空護「よ、待たせたな!」

藍「あ、空護さん。こちらです、付いて来て下さい。」

少年・少女移動中・・・・・・・・

藍「着きました。ここです。」

空護「おう、サンキューな!」

お礼にとびっきり(?)の、恐らく人生初の全力の笑顔をおくってみた。

藍「／／／／／／そっ、それでは失礼しますっ！／／／／」

なんだ？やけに顔が赤かったような・・・。

？「おや、ようやく来たのかい？」

少し歩いたところにいたのは、なんか、ものっそいでかい注連縄をした人だった。

これも、紫とは違ったカリスマ・・・・・・なのか？

空護「すまない、またせたな。」

？「気にするこたないよ。さ、こっちだよ、着いてきな。」

空護「ああ。・・・・ところで、名前は？

俺は神楽空護。」

加奈子「私は、八坂加奈子だよ。一応言っとくと私は神だ。他にも2人いるけど、

着いてから話すよ。」

空護「そうか。兎に角行くとしよう。」

・・・・・・・・・神？

神ってあのなんかやたらと皆信仰してるあれ？

まぁ、そこは突っ込んではいけないところなんだろう。

少年・神移動中・・・・・・・

――――――――守矢神社

加奈子「おーい帰ったぞ～。」

？「お帰りなさい八坂様。諏訪子様！お帰りになられましたよ～。」

？？「あ～う～、お帰りー。ってそっちの子は？」

なんだろう、いろいろと突っ込みどころがあるような気がするのは・・・・・

俺だけか？小っちゃい方の帽子とか、加奈子の注連縄とか。

加奈子「前に話したでしょうが。あの、神楽の生き残りの子を引き取るって。

この子だよ。」

空護「神楽空護だ。よろしく頼む。」

早苗「東風谷早苗です。この神社で巫女をしてます。」

諏訪子「諏訪子だよ～。」

うん、まぁいい人達ってのは確かみたいだな。

俺としても助かる。・・・・・・・あ。

空護「そういえば俺、紫から手紙もらってきたんだ。着くまでは読むなって言ってたし、
折角だから、皆で読むか。」

早苗「そうですね。・・・にしても、なんて書いてあるんですかね？
あの人、何考えてるかわかんない人ですから。」

加奈子「確かに、あの紫だからねぇ・・・・・。」

・・・・・・すごく不安になってきた。
っていうか紫、あんたは一体何をやらかしたんだ？
ま、まぁ気を取り直して読んでみよう。

―空護＋守矢一家へ

これを読んでいるという事はもうそっちに着いたみたいね。
突然だけど・・・空護、貴方と早苗は明日から学校に行って貰うわ。
制服、文具その他諸々はこっちで用意するから、ある程度準備しておいてね。
あ、ちなみに行ってもらうのは『文月学園』というところよ。
そういうわけでよろしく♪

ｂｙ紫（１７歳？）

・・・・・・・・？ナニコレ、ドユコト？
って、はあああぁぁあ！？

空護「どういうことだよこれぇ・・・。」

早苗「やっぱり、何かあるんじゃないかとは思ってましたが
まさかこれとは・・・はぁ。」

空護「まぁ、いいんじゃないか？こちらに不利益と言うわけではなさそうだし。」

加奈子「そういうことだ。早く準備しな。」

なぁ、何故あんたは楽しそうなんだ？
そして、諏訪子が結構空気だったな・・・・・

第二問（後書き）

やっと４話です。
次回ついにバカテスワールドへ・・・・？

第三問（前書き）

今回から台詞の人名を無しにしたいと思います。
読みにくくてすみません・・・

第三問

はいどうも空護です。とある事情で今俺は八雲邸の前に来ております。

え？何でかって・・・・・そりゃあ、ね？

いつもの面倒ごとですよ。ただ、学校に行くだけってコトです。ただ・・・

文月学園って・・・・前に聞いたことあるんだよね・・・。

――――八雲邸

「・・・きたわね。」

「ああ、ったくいきなりすぎないか？」

「だめですよ空護さん。紫さんも考えがあってのことだと思いますし。……多分。」

「あ、それと2人とも、学校では貴方たちは姉弟として通ってもらうわ。」

……え？また爆弾発言？

はぁ、もう、いい加減慣れてしまった自分がいる……

「わ、私と空護さんがですか！？／／／／」

俺の横でめっちゃ顔を赤くしている早苗さん。んな恋人になるわけじゃあるまいし。
……いや、向こうへ行ったら早苗姉さんになるんだっけ。
「そして、貴方たちの監視兼守り役として妹紅に付いて行って貰うわ。」
「初めまして……だな。あたしは藤原妹紅。竹林の案内をしている。よろしくな。」
「神楽空護だ。よろしく。」
……今になって気づいたが、なぜ監視役がついてるんだ？
「何故監視なんて聞かないでね。あなたが暴走したら洒落にならないから。」
何故考えてることが分かる……ってか
「なんで俺の暴走が前提になってるんだ？」
「話してなかったわね。……過去に貴方は力……いえ、貴方に流れる様々な血が……
貴方を暴走させ……1つの地域を壊滅させた。後に『白昼の悪夢』と呼ばれる出来事よ。」
……俺は一体何をしたんだ？なんだろう自分が怖くなってきた。
……え？様々な……血？帰ったら紫に聞いてみようかな……
「ん？もうこんな時間か。早く行ったほうがいいかもな。」

「そうですね、紫さんお願いします。」

「分かったわ。さ、準備して……ってもう準備万端ね。」

紫はそういうと指で空気をなぞるように動かす。すると見慣れた境界が開いた。

「……んじゃ行ってくるわ。」

「ちなみに、向こうにマンションの部屋を用意してあるから。いつでもこっちと出入りができるようにね。」

「そうか。礼はいっとくよ。」

「そんじゃ……行くか！」

そして俺たちは境界に入り別の世界へ向かった。

――――文月学園前

ズズズズズ……スタッ

って目の前に学校あるんですけど！？……まぁ、でも。

「へぇ……結構いいとこじゃん。ん？あれは……先生か？」

「そうみたいだな。……おーい！」

「ん？ようやく来たのか。俺は西村宗一。補習担当の教師だ。」
そう言ってきたのはすっごくごつい人。第一感想はそれだ。
「俺は東風谷空護、こっちは俺の姉さんの早苗。
んでもってこっちが……」
「藤原妹紅だ。よろしく。」
「（小声）なんで同じ苗字にしたんです？」
「（小声）その方が姉弟って感じが出るからね。それと話し方もそんな堅くなくていいよ。
俺そういうの苦手なんだ。」
しばらく小声で会話したあと、俺たちはとりあえず西村先生についていった。

少年少女移動中――――――

「よし、お前たちはここで待っていろ。」
ん？ここは……学園長室か？
結構設備は悪くないな？
にしてもここで優雅な学校生活は送れるのだろうか……

第四問

――――学園長室前

「お前たち、入っていいぞ」

しばらく待って聞こえたのはそんな野太い声だった。

「「「失礼します」」」

ガチャッ……

「きたかい。……ほぉ、あんたたちが紫の推薦ってやつかい。
みてくれは3人とも悪くないさね。」

部屋に入った瞬間コレだ・・・・・・いやまて、今学園長（と思われる人）は
紫って言ったか？

「学園長は紫と知り合いなんですか？」

念のため俺は知り合いであるかを確認してみることにした。

「あぁ、……でもあいつは何考えてるか分かんない奴だからねぇ……
今回の事だってあまり信用してなかったのさ。」

幻想郷を出てもこの評判って……

「あの……クラスは何処へ行けばいいんでしょうか？」

「あぁ……それなんだがねぇ、生憎空いてるのは最底辺のFクラスだけなんだよ。」

……マジかよ……あ、ちなみに俺たちは2年として入ることになってる……

らしいんだが……

「俺は別に構いませんよ？そういうことに関しては我慢強いほうですし。

それに……」

「「「それに？」」」

「この学校は試験の点数を利用して戦争するんだろ？

上の奴等を引きずりおろす下克上ってやつを……やってみたいんだよ。」

「はぁ……やっとまともな生徒が入ったと思ったら……」

「あたしも別にいいけど？ま、あたしは元々空護の監視で来てるからな。」

「わ、わたしもFクラスでいいです！空護の姉としてついていきます！」

お、早速呼び方変えてくれたんだ？

前から思っていたが早苗姉さんは適応能力が高いみたいだな。

「話は決まったみたいさね。西村先生こいつらを教室まで送ってや

りな。」

「分かりました。さ、お前たち、付いて来い。」

少年少女移動中……

なんか途中で馬鹿でかい教室が見えたんだが……あれは、Aクラスか？

と、移動するうちにどんどん設備のランクが下がっていく。

なるほど、Aに近いほど設備が豪華になっていく、そして所属によって

成績の良し悪しがわかる……というわけか。

「着いたぞ、少し待っててくれ。」

そう西村先生に連れてきてもらったのはオンボロのFクラス。

これじゃ、姉さんや、妹紅も集中して勉強できないかもな……

「今更ながら……なんかごめん。俺の選択は間違ってたかもしれない……

こんな教室じゃ……」

と誰にも聞こえない程度の声で呟く。絶対に戦争で勝って見せるよ！

だから……それまで少し待っていてくれ。姉さん、妹紅。

……少し時間が経ったようだが、ああ、担任の人と話してるのか。

――――2―F

ここからは、空護視点と明久視点が混ざります。あしからず。

「全員揃いましたか？それでは自己紹介……といきたい所ですが、
転入生を紹介したいと思います。」

え？始業式に転入生？……誰なんだろう。僕は女の子だといいなぁ
……

聞いてみよ。

「先生！」

「はい、なんですか？」

『『『『女子生徒はいますか！！？？』』』』

僕が聞こうとしたことみんなに先言われちゃった……

まぁ、こんな男子ばっかりのクラスにそりゃ女子はほしいよね。

女子と言えば、クラスメイトの木下秀吉……

「吉井、なんか急にあんたを殴らなきゃいけない気がしたんだけど
？」

女子の直感は恐ろしい……と、忘れてた。

この、ポニーテールが特徴の子は、島田美波。去年から同じクラス
なんだ。

それよりも……

「あぁ、それですが……」

いるのか！？いないのか！？

「２人女子、１人男子です。」

『『『『いいいいよっしゃあああああ！！！！！！！』』』』

クラスの男子の魂の大合唱。

……？一人……男子？

『せんせーどうして男子がいるんですか？』

その質問はひどいと思うよ？

「話してませんでしたね、３人の内１組は姉弟ですよ」

『『『『チッ……』』』』

入ってきたら僕らにはやるべきことがある。それは……

「それでは、入ってきてもらいましょう……どうぞ」

空護ｓｉｄｅ－－－－

なんか先生が姉弟だって事を言った瞬間に険悪な雰囲気になりやがった……

もし仮に襲ってきたとしても……避けたり、やり返してもいいよな

？正当防衛だし。

「それじゃ、行こうか。姉さん、妹紅。」

「「ええ（ああ）」」

ガラガラ……

「総員狙えええええええぇぇぇぇっ！！！！！！！」

『『『『殺せえええええええ！！！！！』』』』

っていきなりかよぉ！！！？？

なんか凶器投げられてるんだけど！？……まぁいい。

……？やばい！このままじゃ姉さんと妹紅に当たる！？

ガキン！！！

『なっ、弾き返しやがった……！』

「さぁぁぁて、てめぇら……姉さん達に向かって物投げるたぁ……いい度胸してんじゃねぇか……えぇ！？」

『『『『『っ！！』』』』』

ちょいと脅かす程度に殺気を発してみせる。

すると案の定バカ共は鎮まった。

「……ほぉ、うちのクラスの奴等を黙らせるたぁ、なかなかやるじゃねえか……」

そういって尚も喧嘩を吹っかけてくるのは背が１８０はあるデカイやつだ。

「あ？あんたもなんかあんのか？姉さんと、妹紅に手ぇ出したあんた等が悪いんだろーが。」

「はいはい、そこまでだよ。空護あんたも落ち着きなって。早苗が困ってるだろう？」

「あ、ごめん。怪我はない？姉さん。」

「……なんか急に雰囲気が変わりやがったな。」

隣ででかいのが目を丸くしている。姉さんの心配してたらそんなに変だろうか？

「静かにしてください。自己紹介を始めますよ。」

トントン…バキィッ！パラパラ……

「あー、替えを持ってくるので先に始めていてください。」

「さて、始めるとするか。」

改めてこの学校生活に不安を覚えた俺たちだった。

第四問（後書き）

コメント、アドバイス等ありましたら、お願いします。

第五問

――――2―F

「さて、みんな落ち着いたようだし、自己紹介を始めるぞ。
そうだな……廊下側のやつらから頼む。」

少しばかり睨み合っていた俺たちを制したの例の背の高いやつだ。
そうして、座禅を組んでいた生徒が立ち上がり自己紹介を始めた。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

そう先陣を切ったのは、秀吉とか言うやつだ。小柄な体格で一見すると女子のように見えるが、
男子の制服を着てるって事は男なのだろう。

「――――というわけじゃ、よろしく頼む。」

1人目が終わるのと同時に、次の奴が立ち上がった。

「……土屋康太。」

ん? 今度の奴はやけに寡黙なやつだな。ふむ、康太か、覚えておこう。
何か縁があるかもしれない。

「すみません、ただいま戻りました。おや、自己紹介をもう始めているようですね。
構わず続けてください。」

お？福原先生が戻ってきたみたいだな。

「――――です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。」

あれ、女子も居たんだ、ま、読み書きができないってのは結構きついからな。

ちなみにだが、このクラスは圧倒的に女子の人数が少ない。

道理で、男子共が女子はいないかと騒ぐわけだ。

「あ、でも英語は苦手です、ドイツ育ちだったので、趣味は――――」

ん？趣味か？女子らしいじゃねぇか。なになに、趣味は……？

「吉井明久を殴ることです☆」

少しでもまともだと思った俺がバカだった……ｏｒｚ

「はろはろ～」

あれ、誰に挨拶してるんだ？

「……あぅ、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

吉井？ああ、さっき攻撃の指示出してた奴か。

んー見るからにバカだな。そんな顔してるし。

明久ｓｉｄｅ――――

「――です、よろしくお願いします。」

ん、僕の前の人が終わったみたいだ。
こういうのは出だしが肝心だからね。軽いジョーク交じりの自己紹介にしよう。

「――コホン、えーと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね♪」

『『『『ダアアァーーーーリィィィーーーンン！！！！！！！』』』』

野太い声の大合唱、う、コレは思ったより不愉快だ。

「失礼忘れてください、兎に角、よろしくお願いします。」

さて、僕の紹介が終わったみたいだし、残るは、転入生３人と残りの人たちだ。

空護ｓｉｄｅ――――

「それでは、東風谷さん（早苗）からお願いします。」
そう先生に促され姉さんが黒板前に立った。大丈夫かな？
「東風谷早苗です。まだ、こっちにきて間もないですけどよろしくお願いしますっ！」
『『『『『うおおおおぉぉぉ！！！！！』』』』』
またしても野太い声の大合唱。実に不快だ。
「はいじゃあ、次弟君お願いします。」
ん？もう俺の番か。さっきは威圧しすぎたからな……少し温厚に行こう。
「えー、東風谷空護だ、さっき先生が言ったように、早苗姉さんの弟（仮）だ。
それと、さっきはすまなかったな。」
とりあえず謝ってみる。……ん、少し、皆の表情が和らいだ。イメージアップ成功だな。
うん、少し付け足しておこうかな。
「それと、俺は姉さんの実の弟ではない。
……本名は神楽空護と言う名前だ。」
自分で言うのもなんだが衝撃カミングアウト。

「ちょっ、何いきなり真相はなしてるんだ（の）！？」
驚いた顔で妹紅と姉さんが詰め寄ってくる。そんな妹紅達をとりあえず引き離し、続けた。
「俺の嫌いなのは、話を聞かない奴、すぐ暴力に移る奴、自分の非を棚に上げ責任転嫁する奴、
そして……人の幸せを踏みにじり、自分だけが幸せであれば良いという傲慢な奴だ。」
うん、コレに関しては俺の本音だ。実際そういう奴は大嫌いだからな。
「さ、妹紅、後は頼んだ。」
コレで俺の自己紹介は終わり。後は妹紅達だけだ。
「……なんか腑に落ちないが、まぁいい。
えと、あたしは、藤原妹紅。得意教科は、歴史物全般と、数学で、苦手教化は、それ以外だな。ま、よろしく頼む。」
『『『『もこたあああああああああん！！！！！』』』』』
はい、本日3度目の大合唱。いい加減ウザイよ。珍しい……妹紅が冷や汗流してる。
呆れたころに不意に教室のドアが開いた。
「あの、遅れて、すみま、せん……」
『えっ？』

誰かのびっくりした声。そりゃ驚くわな。

「丁度良かったです。今自己紹介しているところなので、姫路さんもして下さい。」

「は、はいっ。姫路瑞希といいます、よろしくお願いしますっ！」

見るからに頭のよさそうな奴だ。正直言って、綺麗だ。

「はいっ！質問です！」

すでに自己紹介した生徒が高々と手を挙げる。

「あ、はいっ！なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

聞きようによっては、てか誰が聞いても失礼だろ……今の質問。

姫路を知っていそうな明久って奴に適当に聞いてみるか。

「なぁ、姫路ってそんなに成績優秀なのか？」

「うん、1年のころに学年2位とった人で、その後も常に一桁の順位のすごい人なんだ。」

なるほど……って、そんなに頭良いのか！？

「その……試験のときに熱を出してしまって……」

姫路の言い分を聞いて、クラスからもちらほらと言い分という名の言い訳が聞こえてきた。

『そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに』

『ああ、科学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『昨日彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

想像以上にバカばっかりだ……

「そ、それではよろしくお願いしますっ！」

逃げるかのようにでかいのと明久の間の席に着く姫路。

「あ、あのさ姫――」

明久が声をかけようとしてるな……告るのか？

「姫路」

明久の声をかぶせるようにでかい奴が姫路に声をかける。

おー隣で明久悲しそうな顔してやがる。

「は、はいっ、えーっと――」
「坂本だ、坂本雄二。よろしく頼む。」
ついでに俺も自己紹介しとくか。
「姫路……だったか？俺は東風谷……いや神楽空護だ。よろしくな。」
「あ、姫路瑞希です。坂本君、神楽君よろしくお願いします。」
丁寧語とは……見るからに育ちがよさそうだな。
「ところで姫路、おまえ、体調はまだ悪いのか？」
「あ、それ僕も気になる。」
口を挟んできたのは……誰かと思えば明久か。
「よ、吉井君！？」
明久の顔を見て驚く姫路。
「姫路、明久が不細工ですまん。」
坂本、フォローになってないぞ。
「そんな！、目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗ですし。全然不細工じゃないですっ。
その、むしろ……。」

「言われてみりゃ、そう見てくれは悪くないな。
俺の知人にも明久に興味を持った奴を知ってるし。」
「それって誰ですか！？」
ものっそい食いつき方だ。ま、年頃の女子に珍しいことじゃないし。
「確か久保――」
久保？誰だ？
「利光だったかな」
久保利光（性別　名前からして♂）
「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」
明久……強く生きろよ。
「大丈夫だ半分は冗談だ。」
「ねえ、雄二残り半分は！？」
「はいはい、そこの人たち、静かにしてください。」
「あ、すいませ――」
バキイッ――パラパラ……

「すいません、もう一度替えを持ってきます。」

俺らの扱い……ホントひでぇな……

あ、そうだ！坂本に話があるんだった。

「「坂本（雄二）、ちょっと話がある。」」

ダブった……

「なんだ？」

「「ここじゃ話しにくいから……廊下で。」」

第五問（後書き）

次回……多分Ｄクラス戦に入ります。

第六問

――――２－Ｆ廊下

「で、話とは何だ？まあ、大方この教室の設備だろ？」

俺の考えを一発で当てるとはな……こいつ、只者じゃない。

「ああ、そうだ。」

「うん、僕も同じ考え。」

「そこでだが……、俺はＡクラスに試召戦争を仕掛けようと思う。」

「僕も。ていうかなんでこうも考えがかぶるの？」

明久、それは触れちゃいけない部分だ。

「何が目的だ。」

坂本の目が細くなる。少し警戒されてるようだ。

こうなったら、本音言ったほうが早いな。

「いやだってあまりにもひどい設備だから――」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のない明久が、今更勉強用の設備なんかのために

戦争起こそうなんて、ありえないだろうが。」

……本音を言ってしまえば早いものを。

「いやー、えーっと、それはその……」

「姫路の為……か？」

ビクッ！

「ど、どうしてそれを！？」

「やはりな、お前はカマをかけるとすぐ引っかかる……神楽は？」

「空護でいい。俺もこいつと大体同じ。姉さんや妹紅達の為だ。」

「そうか、――ん？先生が戻ってきたみたいだな。教室に入るぞ。」

「「ああ（うん）」」

坂本……いや、もう雄二と呼んでも良いか？

兎に角促されるまま、俺らは教室に入った。

「さて、自己紹介の続きを。」

「須川亮です。趣味は――」

また、淡々と時間が過ぎていった。

「坂本君。キミが、自己紹介最後ですよ。」

「了解。」

「坂本君はFクラスの代表でしたね。」

なんか、さっきまでと違って代表らしい雰囲気になったな。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも、坂本でも好きに呼んでくれ。

……さて、皆にひとつ聞きたい。」

そういって雄二は、教室の隅々を見渡す。

かび臭い教室。

汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備のリクライニングシートらしいが――不満はないか？」

『『『『大ありじゃあぁッ！！！！』』』』

クラス全員の魂の叫び。これは同意だ。

「そこで俺は……代表として――Aクラスに試召戦争を仕掛けようと思う。」

その時雄二は戦争の引き金を引いた……

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ』

『姫路さんたちがいれば何もいらない』

いたるところから悲鳴が上がる。

「そんなことはない。俺たちにはAクラスに勝てる要素がある。今からそれを証明してやる――

おい康太、姫路たちのスカート覗いてないでこっちへ来い。」

「……！！（ブンブン）」

「「は、はわっ！」」

「ほう？いい度胸じゃないか……！」

あの姉さんはともかく、妹紅が気づかないなんて……こいつ、できる……！

「土屋康太。こいつがあの有名な――寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ。」

「……！！（ブンブン）」

『ムッツリーニだと……？』

『馬鹿な、奴が？」

『だがみろ、未だに除きの証拠を隠そうとしているぞ……』

『ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ。』

……康太……改め、ムッツリーニ。まだ隠すというのか。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。力は良く知っているはずだ。」

「わっ、私ですか！？」

「ああ、うちの主戦力だ、頼りにしている。」

そうか、姫路も成績良かったんだっけな。これは期待できる。

『そうだ、姫路さんがいるんだった。』

『ああ、彼女さえいれば何もいらないな。』

誰だ、さっきから姫路にラブコール送ってる馬鹿は。

「木下秀吉だっている。」

『おお……！』

『あいつ、確か木下優子の……」

こいつもなかなかできる奴なのか？

「そして、一番の注目はこの神楽たちがどれほどできるかということだ。」

『確かに三人ともできそうな奴らだ。』

『期待しているぞ！』

周りから応援の声が上がる。……正直悪い気はしない。

「それに、吉井明久だっている」

シーン……

うん、やっぱりあいつはオチ扱いだったか。大方予想してはいたが……

「いてもいなくてもそう変わらない。要は雑魚だ。」

その言い方はあんまりだと思うぞ？

「兎に角だ。俺たちの力の証明として、まずはＤクラスを征服しようと思う。

皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！！」

『おぉーーーっ！！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台じゃない！システムデスクだ！！」

『うおぉーーーーっ！！』

「「「お、おー……」」」

クラスの雰囲気に気圧された姉さん達が若干引き気味だ。

「明久には宣戦布告の使者になってもらう。無事、大役を果たせ。」

「……下位勢力の使者って、大抵ひどい目に遭うよね？」

仮にも使者だ怪我をしてはならんだろう。

「明久、だったら俺も護衛で行ってやろうか？」

「だめだ。明久一人で行ってもらう。」

「それこそ駄目だ。どうせ、宣戦布告に行った明久がフルボッコにされるのを楽しみたいだけだろ？」

「うぐっ……」

おお。見事に俺の予感が的中だ。

「さ、行くぞ明久。」

「う、うん。」

――――２－Ｄ

ガラガラ……

「すみません、Ｄクラスの代表は居ますか？」

「待ってて、今呼んで来る。平賀ー！」

「なんだい？……って君たちか。で、何の用？」

そういって現れたのは俺よりも少し背の低い、いかにもしっかり者の顔した奴だった。

「ああ、うちの代表がＤクラスに宣戦布告する、とのことだ。時間は……午後で良い。」

ザワザワ……

『おい、聞いたか？』

『あのＦクラスが宣戦布告だと？』

『生意気な。どうする、やっちまうか？』

あのな、全部会話が筒抜けだっての。

挑発してみるか？と、その前に。

「（小声）明久。」

「（小声）なに、空護？」

「俺がＤクラスの奴らにちょっとした、挑発をする。奴らが襲い掛かってくるから、
全力で逃げろ……いいな。」

「そんな……うん。分かった、やられるなよ。」

「よし……おい、Ｄクラス。来るなら来いよ、相手してやるぜ？
怪我しないかは保障できんがな。」

『なにぃ？』

『生意気な……殺るぞ？』

「お前らの相手はコレで十分だ……いくぜ！」

狂乱「シュタイフェ・ブリーゼ」

ん？これ、テイルズの技じゃんって？仕方ないでしょ。
姉さんとリ〇ースやってて、サレの秘奥義見たら手にスペカがあったんだもん。
詳しくは後で話すよん。

ズドーン☆

「うーん、手加減したつもりなんだがな。まぁ、いいだろう。

続きは試召戦争でしてやるよ……それじゃ、アディオス♪」
後ろでのびてるDクラスの奴らが山のように積まれてたのは……見なかったことにしよう。

――――Fクラス

「うん？帰ってきたか……あ？空護はどうした？」
「ただいま。空護ならDクラスの人を引き受けてる。」
カツカツカツ……ガラガラ
「おーい、帰ったぞー？」
「おー帰ってきたか。どうだ、ちゃんと宣戦布告してきたか？」
「抜かりはない。午後からと伝えてきた。」
なんだろう、やけに脱力感。
「「大丈夫か（ですか）？」」
「ああ、問題ないよ。心配してくれてありがとう。姉さん、妹紅も。」
「「／／／／／／」」

あはは……メッチャ顔赤くしてる。

『『『『チッ……』』』』

後ろで呪いの声が聞こえるがとりあえず無視。

「それじゃ、先にお昼にしませんか？開戦も午後からですし。」

「だな、んじゃ、屋上に行くか。作戦も話さないとな。」

「んーっ、さすがに腹減ったなー。空護、飯は持ってきたのか？」

「ああ、それに関しても抜かりはない。姉さん達の分も作ってきたから。」

もしかしてのことも考えてきたから……ね？

――――屋上

「明久、昼くらいまともな物を食えよ。」

「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど。」

「明久君はお昼は食べないの？」

姉さんが驚いた顔で明久を見た。

まともな生活してれば昼はちゃんと食べる筈だが……

「一応食べてるよ？」

「……あれは食べてるって言えるのか？」

え？どういうこった？明久は少食って事じゃないのか？

「何が言いたいのさ。」

「お前の主食って……水と塩だろう？」

一瞬、言葉を失った。水と塩だけで生きてきてるのか？

色々とオカシイダロ……

「失礼な！砂糖だってちゃんと食べているさ！」

「吉井君……それは食べてるとは言いませんよ？」

「食べるというより、舐めるの方が正しいじゃろうな。」

もう、みてらんないよ……

「明久、俺の昼飯……少し食って良いぞ……？」

「ほ、本当！？ありがとう空護！」

そんなこんなで俺の昼飯は殆ど明久に食われた。

次からは、明久分の弁当も作るのか……ハードだな。

第七問

――――屋上

「あの……良かったら、私がお弁当作ってきましょうか？」

「え？いいの！？」

一応手間は省けたみたいだな。うんうん。

「良かったな明久、手作りだぞ？」

「よかったら、皆さんの分も。」

「それはありがたい、是非。」

でもなんでだろう、いやな予感しかしないんだ俺は。

「んじゃ、本題に入ろうか。」

「そういえば坂本、何でＤクラスなの？Ａクラスじゃなくて。」

確かにな、なんでだろう。

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいからな。」

だろうと思った……

「でも、Ｄクラスに勝てなかったら意味ないよ？」

「負けるわけないさ。」

なぜか自信満々の雄二……どういうことだ？

「お前らが俺に協力してくれれば勝てる

いいかお前ら、うちのクラスは――――最強だ。」

「で、俺たちはどうすれば良い？テスト受けてないから開始直後に回復試験……受けとくか？」

「そうだな、教科をできる限り化学と、世界史に限定する。ある程度頃合だと思ったら、出てきて構わない。」

「さあ、やるか！」

「「「「「おおーーーーっ！！！」」」」」

さて、一気に点を稼がないとな。

明久ｓｉｄｅ――――

「吉井！木下たちが渡り廊下でＤクラスの連中と戦闘を始めたわ！」

「うん、了解！」

さて、まずは戦争の雰囲気を感じるんだ。

『さあ来い！この負け犬共！！』

『て、鉄人！？いやだ！補修室はいやだ！！』

『黙れ！戦死者は全員補修室で特別講義だ！戦争終結まで何時間かかるか分からんがみっちりしごいてやるから来い！！！』

『い、いやっ、誰か助けッ――――いやあぁぁぁぁ！！！』

よし大体の雰囲気は分かった。

「島田さん中堅部隊に連絡。」

「うん？なんて伝えるの？」

「総員退避、と。」

殴られた、しかもチョキで。

空護ｓｉｄｅ――――

よし、２教科だけどテストは受け終わった。後マルつけだ。

「先生、採点お願いします！」

「もういいんですか？」

「はい構いません。」

こう見えて頭の回転は速いほうだと……思う。

「「もう終わったの（か）！？」」

「ああ、一刻も早く戦争に参加したいからね。」

「……採点が終わりました。それでは行きなさい。」

廊下にて

ん？あそこに見えるのは明久と……島田か？

「おーい！！」

「く、空護！？回復試験は！？」

「え？そんなのとっくに終わらせてきたよ。」

「たったの数十分で……？」

「兎に角行くぞ。前衛の秀吉たちのフォローに回るんだ、いいな？」

「「了解！！」」

さて、こっからだぜ……？Dクラス代表さんよぉ？
見えてきたな……うっし！

「明久、島田は俺の後ろを固めるようにつけ！背中は預ける！！
――先生！Fクラス神楽空護が世界史勝負を受けます！！―サモン！」

『　Fクラス神楽空護　　世界史
　　７３８点
　　VS
Dクラスモブ×６人　　世界史
　　５９４点　』

『なに！？何だあの点数は！？』

『勝てるわけがない！！』

出てきたのは赤黒い甲冑を纏った、長剣の召喚獣。
って、鎧除いたらほぼセ〇ィロスじゃん！？性にあわないな。

「俺の力を見せてやらぁ！！」

って、どこの厨二病だ俺は……そもそもクサイ台詞は俺には合わねえしな。

「起動（スタート）……幻獣召喚！！

――竜皇・バハムート！！！！……さあ、一気に決めてやる！！」

『メ　ガ　フ　レ　ア』

え、ちょっ、上になんか出てるんですけど！？

ピチュチュチューン！

『　Ｆクラス神楽空護　　世界史　　４３８点

ＶＳ

Ｄクラスモブ×６人　　世界史　　０点　』

メガフレアだけで３００も使うのか……まあ、とりあえず殲滅は完了したし……

「西村せんせー！こいつらを補習室送りでお願いしまーす！！」

お～ものっそい勢いでこっちに走ってきた。皆が鉄人って呼ぶのも頷ける。

「……す、すごい……！あれだけのをたったの…一撃で……！」

「こいつ……何者なの？」

何者って……まあ、俺は人間じゃないしな、そう思われても仕方ないよな。

「明久達、来てくれたんじゃな！」

「おう、待たせたな秀吉！――ところで状況は？」

「うむ、戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいの。」

秀吉が苦戦するとはな。Dクラスもやるね～。

「召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロな状態じゃな。これ以上は無理じゃ。」

「そうか。だったら回復試験受けたほうが良いな。」

「そうじゃな、全教科まで行かなくても1、2教科受けてくるとするかの。」

「あ、ちょっと伝言頼めるか？」

危ない危ない、忘れるところだった。

「ん？なんじゃ？」

「姉さん達がまだ補修室に居たら、『準備が済み次第、後衛部隊の援護に回ってほしい』って。」

「うむ、了解じゃ。」

言うや否や秀吉が走り去っていった。

しばらくして……

「見て、吉井！奴ら、化学教師を引っ張り出してきたわ！」

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。６０代常連よ。」

あいつら、この状況で突っ込もうとしてるのか？なんて危険な。

「待て、その必要はない。」

「え。なんで？」

「ここを、教師とＤクラスの連中の間を縫って、主任の高橋先生のところまで行く。」

「どうやって！？この状況じゃ無理だよ！」

「それが出来るんだよ……俺の能力（チカラ）があればな。」

「……どういうこと？」

「良いから見てな……！」

なんだ？今、何かが頭の中に……！

ふと手を開いてみると、先ほどのバハムートの技である『メガフレア』と書かれたスペルカードがあった。

……出てくるなら、発動した直後にしてほしいもんだな。

「……どうしたの？頭おさえて……」

「あ、ああいや、何でもない。気を取り直して……それ！」

声と同時に俺は空気をなぞる様にして境界を開いた。

にしても、久しぶりに開いた感じがするのは何でだろう。数時間開いてないだけなのに。

ズズズズズ……

「……え！？」

「こいつ……ホントに人間なの！？」

失礼な。コレでもれっきとした人……間……じゃ、ないな。

ある程度話しておくとすっか。

「先に言おう、俺は人間じゃない。島田の言うとおりだ。」

『『『『……る？』』』』』

おーおー俺の後ろの部隊がみーんな眼を点にしてやがる。

「兎に角、早く行くぞ。中堅部隊！俺に続け！但し、あんまりつめこむなよ？

境界がおかしくなるから。」

『『『『おぉーーーーっ！！！』』』』』

部隊移動中……

「で、ここまできたのは良いが、主任は居ないね。
……各自ある程度分散して敵の撹乱に専念せよ！！戦死だけは避けろ！！」

『『『『サーイェッサー！！』』』』

「……すまん、あんたらの仕事、とっちゃったな。」

「いや、それは別に構わないんだけど……」

これ以上俺の出る幕はないな……よし！帰ろう。

「そんじゃ、明久、島田。後は任せた。俺は後衛部隊に回らせてもらうわ。」

「うん、任せて！」

代表んとこ戻ったはいいけど……寝てたら姫路が代表を切り捨てて戦争は終結したらしい。
さすが、というべきか。つーか作者、端折りすぎだろ……

Dクラス代表　平賀源二　討死

『うおぉぉーーーーっ！！！！』

「すげーよ！ホントに勝てるなんて！！」

「坂本万歳！」

「姫路さん、東風谷さん、藤原さん愛してます！！！」

誰だどさくさに紛れてラブコール送ってるのは。

「あーまぁ。何だ……そう手放しで喜ばれると、なんつーか。」

珍しいもんだな。あの雄二が照れてるなんて。

あとで聞いた話だが、なんでＤクラスの設備を手に入れなかったんだろ？

第七問（後書き）

手抜き自重……

ホントにすみません。次回はＢクラス戦にいけると……いいなぁ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0684z/

俺とバカどもと幻想郷

2011年12月25日20時51分発行